ボランティア（スクールトライアル・矢巾町ラーニングサポート）

菊地　洋*

（令和４年２月１日受理）

１．はじめに

教育現場はコロナ禍で様々な制約を受けており、外部の者が児童・生徒とかかわりをもつことは難しい状況です。一方で、教員を志す学生にとっては、大学に入学して早い段階から何かしらのかたちで児童・生徒とかかわりをもつ経験を得ることは、志を高めるうえで重要なきっかけとなると考えられます。

今年度は、昨年度とは異なり、岩手県教育委員会が主催する「スクールトライアル事業」と矢巾町教育委員会と教育学部との共同事業である「ラーニングサポート事業」のどちらも、（途中、新型コロナウイルスの感染拡大で部分的に中止などはありましたが）実施されました。感染の防止をはかりながらも、学生を受け入れるためにご尽力いただきました関係者の方々に御礼を申し上げます。

以下では、本年度の参加状況などについて簡単に報告をさせていただきます。

２．スクールトライアル（岩手県教育委員会主催）

スクールトライアル事業とは、岩手県教育委員会が主催する事業で、岩手県内の連携大学（岩手大学・岩手県立大学・富士大学・盛岡大学）に在籍する教員志望の学生を学校に派遣し、大学生に実践経験の場を提供することで、学校教育に関する理解を深め、教員になるための意識高揚を図ることを目的にしています。今年度は、盛岡市・花巻市・特別支援学校でトライアルの機会を提供いただきました。教育学部生10名（延べ人数）のエントリーがあり、実際に派遣できた事業としては、盛岡市内の小学校における算数個別支援やタブレット操作支援（太田東小学校）や支援学校での活動補助（盛岡となん支援学校中学部）、体育支援（盛岡みたけ支援学校小学部）などがありました。

参加した学生は、参加後に「終了報告書」の提出が課されていますが、「子どもたち一人ひとりによって算数への理解度が異なるため、支援の方法も子どもたちに一貫した指導をするのではなく、個々で変えていかなくてはならないことが分かった。」（算数支援）、「タブレットを授業で使用することで、子どもたちの間で使い方など自然に教え合いの場につながるのだということを学んだ。また（全体で共有することで）自分の考え方だけでなく、他者の考え方も参考にすることができ、新たな学びにつながっていくことを実感した」（タブレット支援）、「たくさん話しかけると、様々な反応をしてくれるため積極的に声をかけることが大切だと思った」（体育支援）など、様々な学びがあったことが記載されています。

コロナ禍ゆえに、学生派遣を依頼する学校そのものが通常期よりも大幅に減っており、参加する学生も少なくなっているのは残念なことです。教育学部の学生は、１年次より各種の実習（観察実習・学校体験実習・主免実習・副免実習）が課されていますが、それ以外にもこのような機会に積極的に参加し、児童理解・生徒理解の経験を増やして欲しいと願っています。

＊岩手大学教育学部

3．ラーニングサポート

この事業は、旧附属教育実践総合センターが発足する際に、岩手大学の近隣自治体と連携した教育実践として、紫波町・雫石町・矢巾町との共同事業として実施されていたものでした。しかし、教育学部の改組や100分授業の開始などで、通常の講義が展開されている期間に学生を派遣することが難しくなり、現在は学生の長期休みに派遣できる矢巾町との共同事業として実施しています。

このプログラムは、矢巾町の中学校（矢巾中学校、矢巾北中学校）において、大学生の講義がない期間（７月末、２月上旬）、課外の時間に自学自習をする中学生へのサポート（具体的には、学校で指定する問題集でわからない箇所の指導、プリント教材をする生徒への支援）が主たる業務となっています。

中学生へのサポートについては、スクールトライアル事業ではほとんど派遣要請がないことから、中学校教諭を志す学生にとっては貴重な学びの機会となっています。

今年度は、７月末の派遣に８名、２月上旬の派遣に15名がエントリーしました。エントリーの内訳は、７月に関しては１年生８名（コロナ禍で感染拡大防止のため人数制限を行い、１年生のみにしました。）、２月に関しては、１年生６名、２年生２名、３年生７名でした（２月に関しては、急速なオミクロン株の感染拡大で事業中止）。

１年生については、７月末の派遣に参加した学生３名から２月に再度エントリーがありました。また、２月に３年生のエントリーが７名もいたのは、主免実習以外に生徒とかかわる機会を持ちたかったという積極的な動機によるものでした。例年、ラーニングサポートは派遣学生を募集してもなかなか申込者がいないという状況でしたが、派遣期間を大学の学事日程に合わせていただいたことや、コロナ禍で児童・生徒とかかわる機会が少ないことから、学生の関心も高まったものと思われます。

７月末の派遣に参加した学生からは、「小さなつまずきを少し指摘するとすべて分かったようにスラスラ解いているのをみてやりがいを感じました。」「最初の方は生徒の声掛けに苦戦したが、自分からどこがわからないの？どこまで自分でできた？などと聞き方を工夫することで、シャイな生徒でも話をしてくれることに気づきました。」「分からないところだけでなく、解けている問題もほめていくことが重要だと感じた。」などと、生徒とのかかわりを通じて多くのことを学んだとの報告を受けています。

（2021年７月29日　矢巾中学校にて）

矢巾町からは、コロナ感染が落ち着いた後には、通常授業に学生がTTとして加わるかたちでの支援なども検討したいとの話もいただきました。

ラーニングサポート事業に関しては、中学校への学生派遣という貴重な機会であることから、学生には積極的に参加していただけるよう、また、参加する学生と支援を受ける生徒の双方にとって魅力あるプログラムとなるように今後も矢巾町と連携をはかっていく予定です。